

VOLUME  
112  
JANUARY  
2010

# HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

Yada 52-1, Suruga-ku, Shizuoka 422-8526 Japan

inside NEWS



祝入賞！

第1回学長杯争奪学内駅伝の入賞チーム

●CONTENTS●

剣祭を振り返って	1	S S E Pに参加して	12
短期大学部大学祭・橘花祭開催！	2	教員人事	14
ネブラスカ大学との連携協定締結	3	平成21年度科学研究費補助金の採択（追加）	14
静岡県と連携協定を締結	3	研究助成採択	14
“模擬薬局”開局	3	受賞	15
グローバルCOEプログラム Werba博士が来学	4	「環境と食品安全性を皆で科学しよう」を開催	17
Skinner博士の本学訪問	4	サイエンスフェスティバルに参加して	18
第2回国際健康長寿科学カンファレンスの開催	5	著書紹介	18
第11回応用薬理シンポジウムの開催	6	活躍する卒業生・修了生	19
日本ニュージーランド共同ワークショップに参加して	7	短期大学部 H P S 第4期生を送り出して	22
産学連携		食品栄養科学部の学外研修旅行	22
第5回「産・学・民・官の連携を考える集い」を開催	8	はばたき寄金からのお知らせ	23
しづおか新産業技術フェア2009	9	第1回学長杯争奪学内駅伝大会開催！	25
平成21年度総合食品学講座閉講式	9	図書館だより	27
特許の紹介	10	H O P E ミーティングに参加して	29
実験動物慰靈祭	10	薬学部力ヶ根ジホールが変身！	29
国際交流		学食にT F T導入	30
ニューカッスル大学夏期語学研修に参加して	11	若者エンパワメントセンター設置委員会の取り組み	31
短期交換留学生が来日	12		

# 剣祭を振り返って

第23回剣祭実行委員長 長尾 竜治

10月31日(土)、11月1日(日)静岡県立大学の学園祭である「第23回剣祭～BACCANO！大騒ぎ～」が開催され、大いに盛り上りました。

剣祭実行委員会のメンバーを中心に、静岡県立大学の学生で「剣祭」を成功させるために準備をしてきました。

剣祭実行委員会は夏休みから本格的に始動し、下田に夏合宿に行き、企画原案を練るなどして、剣祭実行委員で何度も話し合いを重ねました。宣伝としてラジオにゲスト出演、街中・駅前でのビラ配り、ポスター貼りなどをし、インターネットを駆使して剣祭の紹介、コンサートの情報を発信しました。

そうして本番を迎える、オープニングセレモニーから始まり、1日目、2日目があっという間に過ぎ去っていました。各団体が出店した模擬店、団体イベント、フリマ、模擬授業、休憩所、FLOWのライブなどすべてが盛り上がりを見せ、両日実施のお化け屋敷は例年ないクオリティーを誇り、リタイヤ者も続出しました。

1日目のミスコンテストは、会場の経営情報学部棟のカレッジホールに入りきれないほどでした。そして締めくくりが後夜祭。雨が降るなか多くの人にお越しになってもらい、ジャズダンス・チアリーディング・アコースティックライブ・アカペラのパフォーマンスに会場の全員が酔いしれました。

イベントを行ってくれた方、お越しになってくれた方、剣祭に少しでも関わって、参加してくれた方々、全員がつくりあげたサブタイトル通りの「第23回剣祭～BACCANO!大騒ぎ～」だったのではないでしょうか。

最後になりましたが、協力してくれた皆様のお力がなくては、本番当日を迎えることはできなかったと思います。ありがとうございました。そして来年度以降もよろしくお願ひいたします。



オープニングセレモニー時にあげたバルーン



ミスコンテスト

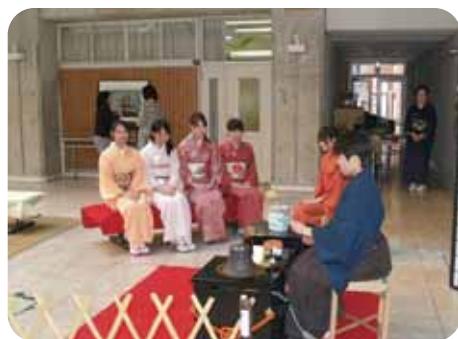
女装した男性の参加もありました



ローマの休日的休憩所



モニュメント下でのバンド演奏



茶道部によるお手前の実演



剣祭実行委員会一同

## 短期大学部大学祭・橘花祭開催！

短期大学部では、10月31日(土)と11月1日(日)の2日間、「絆」をテーマに第13回橘花祭を開催しました。医療・福祉に携わる者にとって、チームワークは大切であり、学科や学年に関係なく、みんなで協力し合うことによって学生同士の絆が深まり、また、地域の人たちとのつながりをもち、絆を深めていこうという思いからテーマを決め、様々な企画を用意、準備を重ねてきました。各学科の特徴を活かした学科展示、学生主導での各イベントやライブなどを行い、みんなが楽しめるようにスケジュール調整をし、去年より参加人数を増やすことができ、活気のある文化祭を行うことができました。

31日(土)には、進路相談会が開催され、短期大学部の雰囲気を味わいながら、大学生活の具体的なイメージをもってもらうことができたのではないかでしょうか。

### 【実行委員長の言葉】

第13回橘花祭実行委員長 原 萌

当までの準備は、思っていた以上に大変なものでしたが、みんなで協力し、励まし合うことによって最後までやり遂げることができました。テーマでもある「絆」を深めることもでき、達成感でいっぱいです。文化祭は一人では作り上げることができないし、実行委員のみんなや協力してくれた人たちのおかげでできたもので、とても感謝しています。来年も感謝の気持ちを忘れず、楽しい文化祭を作り上げてほしいです。



模擬店開店



様々な模擬体験ができる学科展示



橘花祭日和



後夜祭の様子

## ネブラスカ大学リンカーン校との連携協定締結

10月2日(金)、本学は、米ネブラスカ大学リンカーン校との連携協定を締結しました。ハーベイ・パールマン学長らが来日し、本学で調印式を行いました。

静岡県と米国ネブラスカ州との交流の一環として、本学も食品栄養科学部を中心として交流を進めてきましたが、今回、連携協定を締結するにいたりました。

ネブラスカ大学リンカーン校は、カーネギー財団による評価で、研究において最上位にランクされる大学の一つで、約18,000人の学部生及び約4,000人の大学院生・専門職学生が在籍しています。

今後の更なる研究交流の促進が期待されます。



署名後握手をするパールマン学長（左）  
と木苗学長（右）

## 静岡県と「研究分野での連携協定」を締結

静岡県立大学は、静岡県試験研究機関と日常的な連携を強化して地域産業界への支援をより高めることを目的にして、10月16日(金)に静岡県との間で研究分野における連携協定を締結しました。連携支援としては、以下の事項を行うこととしています。

- ① 連携支援をコーディネートする窓口の明確化、地域産業の技術的課題と研究機関の持つ技術シーズを踏まえた地域貢献型共同研究の推進などによる「技術支援」
- ② 中小企業や生産組織からの研修生の連携した受入、研修の充実などによる「人材育成支援」
- ③ 双方の研究員間の定期的な情報交換会の実施などによる「連携強化の基礎となる双方の研究員の交流促進」

今回の連携協定を機に、本学は、大学の「知」を広く産業界に還元し、県と協力して地域の産業振興の発展に一層努めていきます。

(県は、静岡大学との間でも本学と同様の協定を締結しました。)



握手を交わす(左から)木苗学長、  
川勝知事、興静岡大学学長

## 薬学部棟“模擬薬局”開局

平成21年9月8日(火)、静岡県立大学薬学部実務実習事前学習室“模擬薬局”的オープニングセレモニーが行われました。模擬薬局は、薬学部6年制の移行に伴い開設されたもので、病院や薬局での臨床実習に備える事前学習の拠点となるものです。

オープニングセレモニーには、来賓として吉田博之文部科学省薬学教育専門官や神原啓文静岡県立総合病院院長のほか、県病院薬剤師会や県薬剤師会の関係者、大学や静岡県関係者、および薬学部教員と学生の約120名が参加しました。式典の後、模擬薬局の内覧会が行われ、担当教員が参加者に対して最新の機器について説明しました。

模擬薬局は、昨年10月1日からの薬学科4年生を対象とした実務実習事前学習に使用されているほか、県内病院・薬局の指導薬剤師を対象とした学生実習の見学会も行われています。



散剤調剤実習



オープニングセレモニー

# グローバル COE プログラム

## Pablo Werba博士が来学 緑茶と抗高脂血症薬の相互作用に関する国際共同研究について協議

去る4月1日(水)～6日(月)まで、イタリアのミラノ大学医学部関連病院の内科医、Pablo Werba博士が、本学のグローバルCOEプログラム共同研究のため来学し、「Statins tolerability and potential nutrient-drug interactions」（高脂血症患者でのスタチン系治療薬の認容性と緑茶などの飲食物との相互作用の可能性）と題して講演し、グローバルCOEプログラム推進委員と情報交換を行うとともに、国際共同研究について協議しました。

Werba博士は、イタリア人の高脂血症患者において緑茶の飲用がスタチン系高脂血症治療薬の血漿中濃度を約2倍に上昇させることを世界で初めて見いだし、2008年に論文として発表しました。緑茶カテキン類は、コレステロール低下作用も知られていることから、Werba博士が見いだした高脂血症患者でのスタチン系薬剤との併用効果の解析は、そのメリットとデメリットの両観点から極めて興味深いものです。

即ち、緑茶飲用のデメリットとしてはスタチン系薬剤の重篤な副作用である横紋筋融解症やミオパシーの発現を助長することになるが、メリットとして緑

茶を飲用すれば低用量（約半量）のスタチン系薬剤で十分な治療効果が期待できるかもしれません。つまり、「お茶を飲んで薬を減らそう」を推進できれば医療費の抑制に寄与できることも考えられます。一般に、日本人は欧米人に比べてスタチン系薬剤が効きやすいと言われていますが、緑茶飲用習慣が関係していることが考えられます。

協議の結果、緑茶とスタチン剤の相互作用について、本学が基礎研究を担当し、Werba博士がイタリア人患者で、浜松医科大学臨床薬理学講座の渡邊裕司教授が日本人での臨床試験を行うことで合意しました。人種差も含めた医薬品-飲食物の相互作用の新たなエビデンスを提示できる可能性があり、その成果が期待されるところです。



筆者の研究室にて  
Pablo Werba博士と共同研究のディスカッション

## Margot Skinner博士の本学訪問 －機能性食品に関する共同研究－

本学客員教授のMargot Skinner博士が、(独)日本学術振興会の外国人招へい研究者として、9月末から3週間本学を訪問し、大学院薬学研究科と生活健康科学研究科の教員・学生と交流しました。

同博士は、現在ニュージーランド政府の国立機能性食品研究所、Food Innovation, The New Zealand Institute for Plant & Food Research Limited (Auckland) の主席研究員で、約30年にわたって食品や果実の免疫調節機能や健康増進効果の基礎研究から臨床試験まで広範囲な研究を手がけ、新規機能性食品の開発を目指しておられます。

滞在中には、本学グローバルCOEプログラム主催の第2回国際健康長寿科学カンファレンス (ICA LS) や学内セミナーで講演し、ニュージーランド産のキウイフルーツやブラックカレントなどの機能性について紹介されるとともに、本学教員・学生と意見交換

を行ない、共同研究について協議しました。

本学のグローバルCOEプログラム研究プロジェクトと密接に関



学生と交流するMargot Skinner博士  
(前列右から二人目) 夫妻

係することから、今後、同氏と情報交換や技術協力をを行い、実質的な共同研究成果が期待されます。また、徳島大学、東京大学や名古屋大学を訪問され、機能性食品研究者と交流されました。神経科学者のご主人と一緒に、日本の自然や歴史に大変興味をもたれ、とても有意義な滞在となつたようです。

薬学部 教授 山田静雄

## 「第2回国際健康長寿科学カンファレンス」の開催



本学の大学院薬学研究科と生活健康科学研究科は、「薬食同源」を基本的学術理念に掲げ、連携して国内における食薬融合を基盤とした健康長寿科学の唯一の拠点として、健康長寿科学分野の体系化の実現と有為な人材育成を目指した教育研究活動（グローバルCOEプログラム）を行っています。教育活動および成果報告の一環として、さらにこれらの活動を国内外に発信するために、英語を発表および質疑応答の共通言語として昨年に引き続き、「第2回国際健康長寿科学カンファレンス」を10月1日(木)に本学で開催しました。

教育・研究の大学間連携を進める米国のネブラスカ大学・リンカーン校から2名、タイ国のマヒドン大学から2名、ニュージーランドのPlant & Food Research Ltd.から1名の研究者を招聘し、はじめに、ポスターセッションIでグローバルCOEプログラムのメンバー25名による研究発表を行いました。

次に、シンポジウム“食薬融合”は、シンポジウムIで食品科学における技術と新機軸について、

Rolando A. Flores教授（ネブラスカ大学・リンカーン校・食品加工センター長／食品科学工学科長）が、「食品科学における教育、研究、社会貢献への挑戦とその機会」について、Jens Walter 助教授（ネブラスカ大学・リンカーン校・食品科学工学科）が、「健康にとって重要な消化管細菌叢；進化的観点」について講演されました。ネブラスカ州と静岡県は、知事の行き来を含め、連携が進められてきました。その一環として、木苗直秀食品栄養科学部長（現学長）等がネブラスカ大学を訪問しています。今後、教育・研究の両面で連携を強化したいと考えています。この対象となり得る共通の研究テーマが多数紹介されました。



活発な意見交換が行われた  
ポスターセッション

COE拠点リーダー・薬学研究科長・教授 今井康之  
COE副拠点リーダー・生活健康科学研究科長・教授 小林裕和  
グローバルCOEプログラム・事務局スタッフ

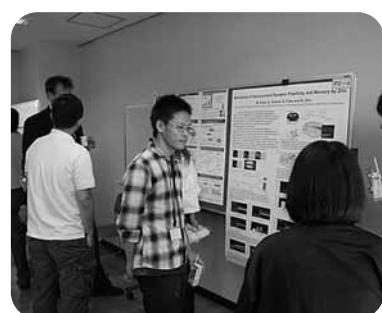


Rolando A. Flores 教授



Jens Walter 助教授

午後最初に、Student Presentationsを行い、オハイオ州立大学での2009科学英語海外研修プログラムShizuoka Health Sciences English Program (SHEP)に参加した世戸孝樹君（薬学研究科D1）が、「薬剤が誘発する光感受性のリスクを予測する新たなツール開発」について、梅根美佳さん（生活健康科学研究科D2）が、「イネの非自立性DNA型活性トランスポゾンnDartでタグされたアルビノ変異al101の解析」について、賴盈伶さん（生活健康科学研究科D3）が、「2型糖尿病モデルラットOLETF腎臓中の一酸化窒素産生の制御に関する酵素の活性変化」について、安藤正樹君（薬学研究科D1）が、「海馬の長期増強への亜鉛の影響」について発表し、ポスター



学生によるポスターセッション

セッションIIでは、ポスター発表を行いました。発表者たちは原稿を読まず、要点をわかりやすく明確に英語で提示した後、質疑応答に円滑に対応し、SHEPの成果を十分に発揮しました。

シンポジウムIIでは、食薬の安全性について、Krongtong Yoovathaworn准教授（マヒドン大学・理学部・薬学科長）が、「生姜、ウコン、茶類に含まれる細胞保護作用を有する化合物の有効性と安全性」について、Narin Boontanon助教授（マヒドン大学・環境資源科学部・副学部長）が、「飲用水中の有機フッ素化合物誘導体の安全性」について講演されました。植物ポリフェノール類の効能は、夙に喧伝されていますが、最近の生理学的知見が述べられ、さらにテフロンなど身近なポリマーの部分構



Krongtong Yoovathaworn准教授 Narin Boontanon助教授



造が環境汚染物質として注視すべきことを高精度質量分析のデータから説かれ、皆感銘を受けました。

シンポジウムⅢでは、機能性食品に向けて：薬と創薬に関して、Margot Skinner博士（NZ Plant & Food Research Ltd. 主席研究員）が、「心身の健康のための食品」について、中山 勉 教授（生活健康科学研究科）が、「茶カテキン類のケミカルバイオロジー」について、菅 敏幸 教授（薬学研究科）が、「カテキンから学んだこと：プローブ分子と創薬のためのリード化合物の開発」について講演されました。いずれも、身体的、精神的な健康維持が期待できる食品成分の生理機能に関する最新の知見の発表であり、こうした分野の研究の進歩や新しい発見は、新世代の機能性食品や医薬品の開発に繋がるを考えられます。

参加者は、教員57名、大学院生108名（博士後期課程27名、博士前期課程81名）、ポスドク・研究員・学部生・学外聴講者・その他85名の計250名でした。



中山 勉 教授



Margot Skinner博士



菅 敏幸 教授

本カンファレンスの開催を通して、本学における健康長寿科学の教育研究活動を国内外に発信することができたと考えております。今後もこのようなカンファレンスや研究会を継続して開催することにより、食薬融合分野における研究者や企業の連携の輪が広がることを期待しています。

終了後、市内のホテルで交流会を開催し、招聘研究者と学長、グローバルCOEプログラム事業推進担当者、研究協力者、計25名が出席して、親交を深めるとともに情報交換をしました。

## 第11回応用薬理シンポジウム－健康長寿への応用薬理学的挑戦－の開催

薬学部 教授 山田静雄



たくさんの参加者で埋められた会場

また、特別講演として、厚労省医薬食品局の中井清人先生には、薬事監視の視点から医薬品・食品開発、大阪大学薬学研究科の馬場明道先生には、神経ペプチドPACAPの中枢機能、教育セミナーとして、東邦大学医学部の榎原隆次先生には、中枢疾患と排尿障害、日本薬科大学の永田勝太郎先生には、

本シンポジウムは、病態の解析、薬物の作用や創薬に関する研究成果についての発表や議論を通して情報交換する目的で、1999年に第1回が開催されて以来、毎年開催されています。

今回は、“健康長寿への新たな方向性を模索する”という趣旨で、1日目は医薬品、2日目は機能性食品に焦点を当てて、生理活性ペプチドや機能性食品による生活習慣病治療戦略、排尿障害の新規治療法などに関する研究成果がシンポジウム（20演題）並びにポスター（42題）として発表され、活発な討論が交わされました。

日本人の酸化バランス防御系と統合医療について、最新の情報を提供していただきました。

今後ますます複雑化していく各種治療法に関して、新たな治療薬や、信頼可能な機能性食品を駆使することで確実な治療法・予防法を確立するための科学的基盤を築く重要性を強く感じた次第です。

参加者は、大学や製薬・食品関係の企業研究者に加え、本学の教員や学生を含め、2日間で400名を

超え、主催者として無上の喜びでした。また、高大連携の一環として県内の高校生も参加してくれました。

最後に、本会を開催するに当たってご尽力を頂いた組織委員と実行委員の先生方、ご協賛頂いた本学グローバルCOEプログラムと各社に心から御礼申し上げます。

## 日本－ニュージーランド共同ワークショップに参加して

薬学部 助教 瀧 優子

7月27日(月)に成田空港よりニュージーランドに向かい、28日(火)よりニュージーランドの研究機関を訪問し、日本－ニュージーランド機能性食品共同ワークショップに参加してきました。本訪問は、(独)科学技術振興機構(JST)による戦略的国際科学技術協力推進事業の一環として開催され、ニュージーランドと日本の間でバイオサイエンス及びバイオテクノロジー分野での協力を促進するという戦略に基づき、機能性食品分野での二国間の交流を推進する礎となるものとして開催されたもので、オタゴ大学およびマッセイ大学 Riddet Institute、AgResearch Ltd. を訪問し、ニュージーランドにおける機能性食品に関する研究について様々な話を聞くことが出来ました。

30日(木)、31日(金)とマッセイ大学 Riddet Institute で行われた日本－ニュージーランド共同ワークショップでは、“BOTANICAL PRODUCTS AND FOODS: EFFICACY, SAFETY AND INTERACTION WITH MEDICINES”というタイトルで、ハーブ類の受容体結合活性および薬物代謝酵素への影響について本学の山田静雄教授より発表があり、共同研究者としてご紹介頂きました。この発表に対し、聴講者の方々に食品と医薬品の相互作用など、薬学的な視点における研究に興味を持って頂きました。特に、本学の客員教授のPlant & Food ResearchのMargot Skinner先生から、多成分からなる食品における、複雑な薬理作用や相加・相乗効果についてのご講演を頂き、今後の共同研究についての打合せを行いました。また、大学のみならず国

立の研究機関、企業と様々な立場における研究について話が聞け、共同研究の可能性について模索する貴重な機会でした。

本ワークショップはグローバルCOEプログラムの研究とも非常に関連が高く、本ワークショップを通じて、食品と薬品の研究における融合の重要性を再認識すると共に、参加していた研究者の皆様と今後とも交流を深めることが、グローバルCOE研究の推進に繋がると考えられます。

また、今回の訪問に関してご尽力頂きました関係者各位にこの場をお借りしてお礼申し上げます。



マッセイ大学Riddet Instituteにてワークショップ演者の方々  
筆者は、後列の左から二人目

# 産学連携

## 第5回「“産・学・民・官”の連携を考える集い」を開催

産学官連携推進本部 本部長 府川博明

11月19日(木)に「静岡県立大学“産・学・民・官”の連携を考える集い」が開催されました。

この行事は、「産・学・民・官の連携促進」をテーマに学外の企業、研究機関、行政を県立大学にお招きし、本学の教職員と交流を図ることで、本学の研究成果（シーズ）を社会のニーズとマッチングし、産学民官連携事業を進める「場を作る」ための行事です。

内容は、①研究室公開・研究情報公開コーナー、②産学民官連携セミナー、③交流会の3部構成で開催されました。



薬学部 鈴木隆教授

第1部の研究室公開は、13時30分から14時30分まで各学部で行なわれました。

各研究室では研究内容のポスターを掲示し、教員が学外の企業や研究機関、行政関係者等に熱心に説明し、意見交換する姿が見られました。また、小講堂では、13時30分から16時30分まで「研究情報公開コーナー」が設けられました。学内の17人の研究者が研究内容をパネルやポスター、試作品や試食品を展示してアピールしました。また、学外からも静岡県新産業集積クラスター、日清ファルマ㈱他、地元企業が出展され、多くの方々が展示内容の説明に熱心に耳を傾ける光景が見られました。

第2部は14時30分から大講堂で開催され、木苗学長の挨拶に続いて、来賓である静岡県知事代理 丸山県民部長様、続いて、興静岡大学長様より御挨拶をいただきました。その後、「ひとの健康・地域の健康」をテーマとしたセミナーが開催されました。

まず最初に、本学の取り組みについて、木苗学長が「産学民官連携を目指す本学のチャレンジ」をテーマに講演し、2番目に薬学部の鈴木隆教授が「新型インフルエンザと治療薬～産学連携を目指した研究成果の紹介～」をテーマに講演、3番目に環境科学研究所の吉岡教授が「大学における研究とその企業化の一例～キトサン高分子界面活性剤の開発～」

をテーマに講演しました。次に、特別講演として、聖マリアンナ医科大学准教授の山口葉子様より「大学とのCreativeな関係構築～大学発ベンチャーが成功するための取り組み～」をテーマに講演いただき、続いて浜松医科大学名誉教授の高田明和様より「栄養と健康長寿～老化に伴う心や脳の病からの克服～」について講演いただきました。

第3部は、17時30分から学生ホールにて、企業、研究機関、行政関係者と本学教職員など、およそ150名が参加して、交流会が開催されました。本学マンドリン部による素晴らしい演奏も行なわれ、和やかな雰囲気の中で、飲み物を片手に会場のあちらこちらで、名刺交換を含め、交流が行われました。

今回の行事について、学内外の方々に御参加・御協力をいたしましたことを、厚く御礼申し上げます。



小講堂 展示の様子



環境科学研究所 吉岡教授



聖マリアンナ医科大学 山口葉子准教授



浜松医科大学 高田明和名誉教授



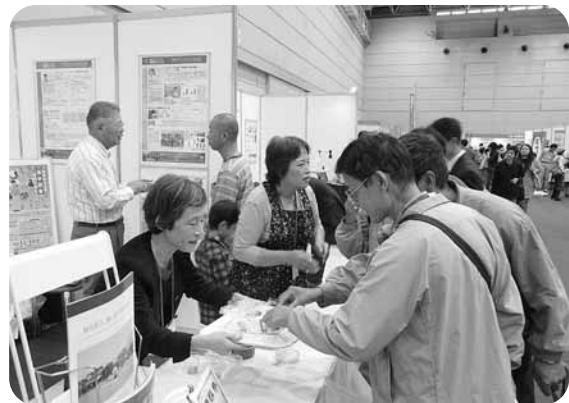
第3部 交流会の様子

## 「しづおか新産業技術フェア2009」で本学の产学民官連携をPR！

県内のベンチャー・中小企業や大学、行政機関等を一堂に集め、新製品・新技術等のPRや発表の場として開催される総合展示会「しづおか新産業技術フェア2009」が、10月23日(金)・24日(土)・25日(日)の3日間、ツインメッセ静岡にて開催され、計8,643名の方々が来場しました。

84団体が参加した今回は、「環境配慮型製品やサービス」「森林の多様な機能の紹介や県産木材の利用促進」等、広く県民・事業者の皆様に紹介し、環境ビジネスの振興・森林整備の推進を図るためのイベント「第7回しづおか環境・森林フェア」も同時開催され、本学の環境科学研究所が出展しました。

本学のブースでは、企業との共同研究成果をパネル展示するとともに、成果物である、米ペーストパン、茶飯、新規発酵茶飲料、GABAチョコ（グリコ）等を訪れた多くの人に試食、試飲してもらい、その成果を実感していただきました。また、ブース内においても、先生方を中心に、来場者からの質問への丁寧な対応と説明により大変好評を得ることができました。資料や物品の提供から運営参加に至るまで多くのご支援、ご協力を賜り、中小企業から一般県民まで多くの方に、本学の产学民官連携をPRできましたことをご報告するとともに感謝申し上げます。



来場者に説明する貝沼教授（左側・食品栄養科学部）と竹元講師（薬学部）

## 平成21年度総合食品学講座閉講式

平成21年度フーズ・サイエンスヒルズ推進事業の総合食品学講座の閉講式が11月2日(月)に執り行われました。本講座は、この8月初旬から、本学会場を中心に、県工業技術研究所会場等での実習を交え、約2ヶ月半、合計72時間にわたって開催されました。2年目の今年は、所定の基準を満たした14名の社会人受講生（うち2名は本学食品栄養科学部卒業生）に、木苗直秀学長（フーズ・サイエンスセンター長兼務）と（財）しづおか産業創造機構 神谷聰一郎理事長の連名による修了証書が授与されました。また同日、基準を満たした学生枠受講生19名（本学食品栄養科学部生13名、静岡理工科大学理工学部生5名、同大学院生1名）に対して、中山勉食品栄養科学部長より、本講座の講義科目課程修了証書が交付されました。閉講式後は、本講座の社会人受講生、前年度受講生、そして諸々の多くの関係者を交えての交流会が行われました。和やかな雰囲気の中で親密な交流が随所に生まれていました。次年度以降も、県立大学会場を中心として、総合食品学講座は続いていきます。昨年度から今年、今年から次年度へと、県内食産業の交流の輪は着実に広がりつつあります。



## 特許の紹介

発明の名称：脂肪酸の測定のための方法およびシステム（特許第4359661号）

発明者：栗木清典（他1名）

食品栄養科学部栄養生命科学科

公衆衛生学研究室

脂質・脂肪酸の過剰摂取やアンバランス摂取を改善して生活習慣病を一次予防することが、国際的に重要な課題となっています。培養細胞や実験動物による研究は、ドコサヘキサエン酸（DHA）に抗腫瘍効果があると報告しています。しかし、わが国の疫学研究は、青身魚に特異的に多いDHA摂取量の多い者でがんの発生リスクが低いことを見出しています。体内で生合成されないDHAの摂取量は、血液中のDHA濃度を測定することで評価できますが、非常に煩雑な手作業による測定方法のため汎用されていません。この数十年間、実用的な測定方法は開発されていません。そこで、効率的溶媒抽出法を用いて迅速、簡便、安価、高精度に、多検体の脂肪酸を定量的に測定する方法を開発し、特許にしました。そして、この方法を大規模病院疫学研究で用いて、大腸、乳房、胃のがんリスクは、赤血球膜中のDHAレベルの高い者で低いことを明らかにしました。現在、DHAの多い青身魚の摂取を勧奨し、がんをはじめとする生活習慣病の一次予防を啓蒙しています。健診・検診機関や医療機関で、血液中のDHAレベルを指標にして、栄養士・管理栄養士が科学的根拠に基づいた食生活習慣の改善指導を実施できる環境づくりに挑戦したいと考えています。がんをはじめとする生活習慣病の治療にも応用したいと考えています。将来、増大する医療費の抑制に結び付くのではないかと期待しています。

## 実験動物慰霊祭

12月12日(土)、静岡県立大学小講堂において、平成21年度静岡県立大学実験動物慰霊祭が行われました。

慰霊祭には、木苗直秀学長をはじめ、各学部・研究科の教職員、大学院学生、学部学生、研究生をあわせて200名以上が参列しました。木苗学長から式辞があり、引き続き教職員を代表して食品栄養科学部・渡辺達夫教授、大学院生を代表して大学院薬学研究科・清水裕貴さん、学部学生を代表して薬学部・大井一樹さんが、それぞれ弔辞を述べました。最後に参列者全員で、実験で犠牲となった動物の靈に黙祷をささげました。



多数の参列者



実験動物慰霊祭の様子

— International Exchange Programs —

# 国際交流

## ニューカッスル大学夏期語学研修に参加して

国際関係学部2年 大石美奈・佐野倫子・森山麻衣子・山本綾香・渡辺成美

私たちは、友達5人でこのプログラムに参加しました。準備は早い時期から進め、最初は7月27日(月)からの予定でいました。ところが、突然、8月3日(月)への変更をもとめられ、航空券のキャンセルと手配に追われてとても不安になりました。ほかにも、授業料の振込確認が遅れるなど、出発前のイギリスの印象はけっしてよいとはいえませんでしたが、到着後は忘れてしまいました。大学付近のモニュメント、古い建物のすべてに心をうばわれたからです。

(山本綾香)

最初の1週間は、授業、寮生活、そして英語を話すのに慣れるだけで精一杯でした。とても長かったです。授業の始まった初日にクラス分け

インターナショナルイブニング

けのテスト（ディクテーションと文法）を受け、ドイツ人、中国人、ポルトガル人とクラスメートになりました。ドイツ人のクラスメートは積極的に発言するのに、私を含めた日本人はそうではなく、いつも静かね、と彼らに言われたことを憶えています。1週間が過ぎたころ、私も意見を言ってみたい、もっと英語で会話をしてみたいと思い、授業に積極的にのぞみました。そして最終日、先生から「本当に自信をもって自分の意見を言えるようになったね」といわれ、嬉しくて泣いてしまいました。（佐野倫子）

私は最上級のクラスに振り分けられましたが、最初はまったく授業についていけませんでした。クラスにはドイツ人が11人、中国人が2人、日本人が私を含めて2人で、正直に言うと、慣れるまではかなりつらかったです。文法のクラスでは日本語でも説明が難しいことをペアで話し合い、必ず自分の意見を言わねばなりません。ペアの相手に迷惑がかかることに悩み、先生に相談してクラスを変えてもらおうとさえ考えました。しかし、せっかくのチャンス

だからと自分に言い聞かせ、前向きな気持ちで授業を楽しもうと心がけました。速すぎて聞き取れなかつた英語も、

少しずつ理解できるようになり、修了証をもらうころには、このクラスで本当に良かったと感じました。この経験はきっと自信になると思います。

(渡辺成美)

同じプログラムに参加していた他の国の人たちと仲良くできただけでなく、彼らが、日本の文化に興味を示してくれたことがうれしかったです。今年はドイツから的人がほとんどでしたが、お互いの文化を紹介したりして、楽しい時間を共有できました。私たち日本人の何気ない仕草について質問される事も多く、私はそうしたやりとりを通して、日本人のふるまいが外国人の目にどう映っているのかを理解しました。また、ドイツやイギリスの人たちの言動に戸惑うこともありましたが、文化の違いは本当に面白いものでした。たくさん異文化交流ができたのも、ドイツの人たちと同じ寮で生活したからでしょう。

(森山麻衣子)



修了式の後で

寮のバーで開かれたインターナショナル・イブニング（パーティ）では、各国の人が自分の国を紹介しました。劇やゲームを演し物にしたところ、大うけで“*We love Japan!*”日本のことによく知らないという人も多かったのですが、おた



ヨークminsterで（佐野：右から1人目、大石：3人目、渡辺：5人目、森山：6人目、山本：7人目）



インターナショナルイブニング

けのテスト（ディクテーションと文法）を受け、ドイツ人、中国人、ポルトガル人とクラスメートになりました。ドイツ人のクラスメートは積極的に発言するのに、私を含めた日本人はそうではなく、いつも静かね、と彼らにと言われたことを憶えています。1週間が過ぎたころ、私も意見を言ってみたい、もっと英語で会話をしてみたいと思い、授業に積極的にのぞみました。そして最終日、先生から「本当に自信をもって自分の意見を言えるようになったね」といわれ、嬉しくて泣いてしまいました。（佐野倫子）

私は最上級のクラスに振り分けられましたが、最初はまったく授業についていけませんでした。クラスにはドイツ人が11人、中国人が2人、日本人が私を含めて2人で、正直に言うと、慣れるまではかなりつらかったです。文法のクラスでは日本語でも説明が難しいことをペアで話し合い、必ず自分の意見を言わねばなりません。ペアの相手に迷惑がかかることに悩み、先生に相談してクラスを変えてもらおうとさえ考えました。しかし、せっかくのチャンス



ニューカッスルの街並み（中央はグレイ記念塔）

までの英語学習のゴールになると思っていました。

がいの距離が縮  
ることを実感  
できました。  
(山本綾香)

この研修に参  
加する前は、イ  
ギリスに行って  
英語を勉強する  
ことが自分の今

ところが、帰ってきた今は英語への意欲がさらに高  
まりました。一度で十分と考えていた夏期研修も機  
会があればまた行きたいとさえ思います。4週間と  
いう短い期間でしたけれど、数多くの素敵なお会い  
があり、過ごした時間は私にとってとても大切な思  
い出になりました。これからも人との出会いを大  
切にしたいですし、言語の習得、特に英語力はそうい  
う自分にとって必要なものなのだと改めて気付かさ  
れました。4週間の思い出をささえに、これからも  
頑張っていきたいと思います。 (大石美奈)

## リール政治学院、フィリピン大学から短期交換留学生が来日

本学と交流協定を結んでいるフランスのリール政治学院とフィリピン大学から、それぞれ9月末と10月初めに、短期交換留学生が来日し、現在本学で学んでいます。

来日したのは、リール政治学院のルモワース・ジュスティーヌさんとフィリピン大学のポーリン・アン・ネポムセノさんです。

ジュスティーヌさんは、リール政治学院の2年生で政治学を専攻しています。

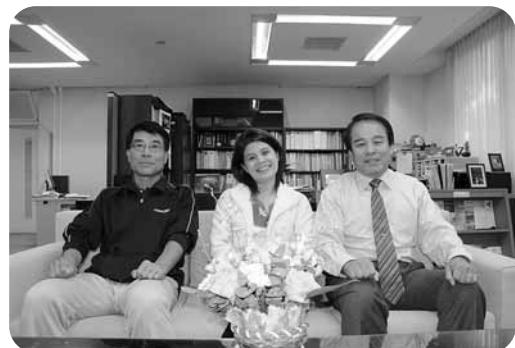
ポーリン・アンさんはフィリピン大学の2年生で、芸術文学部で音声通信を専攻しています。

2名とも、それぞれ、国際関係学部の稻田教授、小幡教授の指導のもと、日本語や日本文化などを学んでおり、ジュスティーヌさんは来年の8月ごろまで、ポーリン・アンさん来年3月まで滞在予定です。

静岡でいろいろな経験をして、たくさんの友人を作っていただきたいと思います。



ジュスティーヌさん（中央）、右：木苗学長、左：稻田国際関係学部教授



ポーリン・アンさん（中央）、右：木苗学長、左：小幡国際関係学部教授

## SSEP (Shizuoka Summer English Program) に参加して

国際関係学部2年 柴山 翠

私は8月2日(日)から3週間米国・オハイオ州立大学の英語研修に参加しました。今年度は新型インフルエンザの影響なのか参加者はわずか5人、しかも私は唯一の2年生かつ唯一の女子学生でした。参加する前は不安でしたが、今となっては少人数で充実

した授業を受けられたことが良かったと思います。

このプログラムでは、午前中は全体での授業、午後はカンバセーションパートナーと出かけたりそれぞれの宿題を進めたりします。授業ではマリアナ先生によってオハイオ州の歴史や自然について教えて

もうったり、短いディスカッションなどを行ったりしました。そして毎日たくさんの宿題が出ました。私のカンバセーションパートナーになってくれたLauraは今年の9月から日本の大学に留学することもあって日本についてとても興味を持っている方でした。Lauraと私は趣味が合い、本屋や映画、ショッピングモールなどでとても楽しい時間を過ごすことができました。彼女とは日本で会う約束をしていてまた会えることが楽しみです。

そしてそれぞれの学生は週末に2泊3日でアメリカ人の家庭にホームステイをしました。私を受け入れてくれたLaCavaさん一家には女の子が3人いてまるで姉妹のように接してくれました。家族全員が温かく迎えてくれてとても嬉しかったです。動物園やプールに連れて行ってもらったり、家族全員で食事の準備をしたり家のシアタールームで映画を見たり、非常に充実した3日間でした。私のホームステイは1週間目の週末でしたが、次の週末にもまた私を家に招いてくれました。このホームステイでは自然な英語を学ぶことやアメリカの家庭の生活を体験することができ有意義な時間を過ごすことができました。

また、現地の子ども達を招いて私たちが日本の文化を紹介するPassport to Japan Programが行われました。今年は折り紙、日本の遊び、書道を紹介しました。私は司会を務めたのですが、初めは私が何かしゃべっても全く反応がなく不安で仕方ありませんでした。しかしおもちゃや折り紙のコーナーになると子ども達はとても興味を持ってくれ、たくさん質問してくれたのでほっとしました。準備をしていく中で気づいたのは、私たち自身が日本の文化をあまり知らないということでした。外国の文化を理解しようという時にはまず自分たちの文化をきちんと知らなければならないのかなとも感じました。

このプログラムの最後に学生はそれぞれ1つのテーマを決めてプレゼンテーションします。プログラムの最初の週から発表のテーマ決め、アンケート作りやその配布、パワーポイントを使っての発表の準備などを行っていました。今年は鈴木理事長と赤池副参事をお迎えし私たちは少々緊張していましたが、それぞれのテーマについて発表し、プレゼンテーションについての質問に答えました。わたしは『日本人とアメリカ人との恋愛観の違い』をテーマにし、多くの方にアンケートに協力していただき、プレゼンテーションを行いました。初恋の年齢や結婚相手に求めるものなどを聞いていくといくつか日本人とアメリカ人との違いがわかりました。このプレゼンテー

ションを通して、ただ受け身で与えられた課題をこなしていくような勉強ではなく、自分で考え行動することの意味を学んだような気がします。

最終日の午後には修了式と、ホストファミリーやカンバセーションパートナーを招いての小さなパーティーが開かれました。お世話になった方々と別れるのはとても寂しかったですが、オハイオで学んだ事がこれから私の勉強の力になるような気がしました。

私たちがオハイオ州立大学で研修するに当たってご協力いただいた全ての方々に感謝申し上げます。



カンバセーションパートナーとその友だち（筆者は左から3人目）



ホストファミリーと

## 教員の人事

●採用	(平成21年10月1日付け)			(平成21年12月1日付け)	
内野 智信	薬学部	講師	円谷 由子	食品栄養科学部	講師
坂巻 静佳	国際関係学部	講師	●昇任	(平成21年10月1日付け)	
勝又 里織	看護学部	講師	脇本 敏幸	薬学部	講師
小林 亨	環境科学研究所	教授	森山 優	国際関係学部	准教授

## 平成21年度科学研究費補助金の採択状況（追加）

平成21年度に新規採択された研究代表者及び研究課題

若手研究（スタートアップ）

氏名	所属	職名	研究課題
井上 和幸	薬学部	講師	精神疾患脆弱性、および薬物応答性に関する因子の探索
栗木 清典	食品栄養科学部	准教授	生体指標を用いたがん一次予防のための効果的な栄養指導アプローチの確立
繁田 佳映	看護学部	助教	IAD（失禁に起因した皮膚障害）に関する客観的リスクアセスメント指標の開発

## 研究助成採択

### しみず新産業開発振興機構

研究者：薬学部 教授 今井康之

研究課題：健康長寿科学教育研究の戦略的新展開

### 内藤記念科学奨励金

研究者：薬学部 教授 真鍋 敬

研究課題：ピンポイント触媒の創製による直接的分子変換法の開発

### (財)慢性疾患・リハビリテイション研究振興財団

研究者：薬学部 准教授 海野けい子

研究課題：中高齢期からの緑茶カテキン摂取による脳内糖代謝に対する作用の検討

### (財)武田科学振興財団

研究者：薬学部 准教授 川島博人

研究課題：新規コンディショナルノックアウトマウスを用いたリンパ球ホーミングの分子機構の解析

### (財)持田記念医学薬学振興財団

研究者：薬学部 講師 浅井知浩

研究課題：RNA創薬に向けた核酸デリバリーシステムの構築に関する研究

### (財)臨床薬理研究振興財団

研究者：代表研究者 薬学部 講師 林 秀樹

共同研究者 薬学部 教授 伊藤邦彦

薬学部 教授 山田 浩

J A 静岡厚生病院 副院長 坪井声至

研究課題：関節リウマチにおける薬理遺伝学研究

### (財)東京生化学研究会

研究者：薬学部 講師 林 秀樹

研究課題：関節リウマチにおける薬物応答性の予測マーカーとしての血中ホモシスティン濃度測定の臨床応用

### (財)旗影会

研究者：食品栄養科学部 准教授 熊澤茂則

研究課題：鶏卵漿尿膜法（CAM法）を利用した血管新生制御を有する食品成分の探索

### 医療法人社団盛翔会（継続）

研究者：看護学部 教授 木村正人

研究課題：腎疾患の成因と治療法に関する教育・研究

### やすや 食と健康研究所

研究者：大学院生活健康科学研究科 博士後期課程1年 若杉悠佑

研究課題：雑豆類の摂取が白米を主食とする食事のGIに与える影響

## 受 賞

### ■日本排尿機能学会賞を2部門（基礎部門、論文部門）で受賞

9月10(木)～12日(土)に福岡市で開催された第16回日本排尿機能学会（JALリゾート シーホークホテル福岡）において、薬学部薬物動態学分野の研究発表及び学術論文が基礎部門、論文部門の2部門で学会賞を受賞しました。

基礎部門では、27応募演題から第一次審査で厳正に選考された3演題の口述発表（15分間）が行われ、大学院博士前期課程2年の吉田徳さんの発表演題「小動物 Positron Emission Tomography (PET) を用いた抗コリン薬の脳内受容体結合活性の評価」が学会賞として選考されました。

また、論文部門では、昨年度に排尿機能学会誌に掲載された論文の中から、伊藤由彦助教らの論文「プロピペリンおよびオキシブチニンのバニロイド受容体 (TRPV1) に対する作用」が学会賞に選ばれ、臨床部門を含めた3部門中、2部門での快挙となりました。

日本排尿機能学会は、最近、高齢化に伴うQOL疾患として注目されている過活動膀胱や前立腺肥大による排尿障害などを主要テーマとする臨床医を中心とした会員数約1,200名の泌尿器系専門学会です。排尿障害の基礎研究成果の発表と情報交換の場として、11月27日(金)には第2回排尿障害モデル動物研究会（代表世話人：薬学部山田静雄教授）がホテルセンチュリー静岡にて開催されました。



授賞式（左側が吉田徳さん）

### ■平成21年度静岡市有功者に認定され表彰

国際関係学部の前山亮吉准教授は、静岡市より平成21年度静岡市有功者（静岡市有功者表彰規則2条）に認定され、11月23日に静岡市役所で表彰を受けました。

表彰理由は、「多年にわたり静岡市情報公開審査委員会委員（静岡市個人情報保護審査委員会委員を兼務）として、すぐれた識見をもって実施機関からの諮問について調査審議するなど、本市情報公開制度の適正な実施に大きく寄与されました」という内容です。

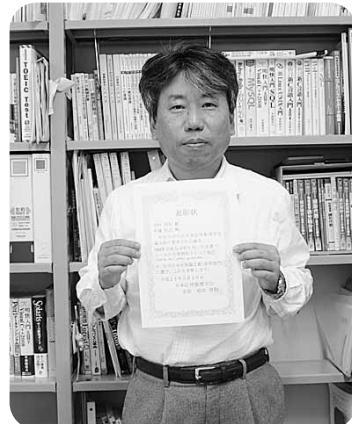
前山准教授は平成9年4月から12年の長きにわたり「静岡市情報公開の番人」ともいるべき情報公開審査委員会・個人情報保護審査委員会委員を歴任し、現在は会長職務代理を務めています。



前山亮吉准教授

### ■日本応用数理学会 平成21年度論文賞（実用部門）を受賞

経営情報学部の斎藤和巳教授は、日本応用数理学会より、平成21年度論文賞（実用部門）を受賞し、9月29日(火)に大阪大学で開催された日本応用数理学会2009年度年会において表彰状を手渡されました。受賞の対象となった論文は、日本応用数理学会論文誌18巻3号pp.363-388「PMM型主成分分析を用いた文書ストリームの主要潜在トピック抽出」で、刻々と状況を伝えるオンラインニュースなどの文書ストリームから主要潜在トピックを抽出する新たな手法として、多重トピックモデル（PMM）型主成分分析（PMM-PCA）法を提案し、ウェブ空間内の実際の文書ストリームを用いた実験により、PMM-PCA法の有効性を実証したものです。PMM-PCA法は、離散単語頻度ベクトルで表現され複数トピックを有する文書の確率モデルから理論的に導出され、テキストマイニングにおける多様な応用への道を開く方法論であることが評価されました。



斎藤和巳教授

## ■第6回日本カテキン学会で優秀ポスタープレゼンテーション賞を受賞

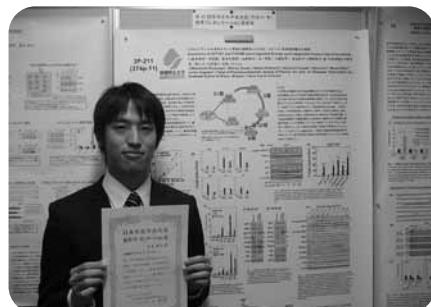
大学院薬学研究科博士前期課程2年の石川雄一さん（生物薬品化学教室 星野教授）が、2009年9月9日(木)に名古屋で開催された第6回日本カテキン学会で優秀ポスタープレゼンテーション賞を受賞しました。石川さんは「緑茶カテキン摂取による脳機能低下抑制効果：中高齢マウスを用いた検討」という演題で、海野准教授、佐々木博士（東京都老人総合研究所）、高林准教授（短期大学部）、星野教授との共同研究の成果をポスター発表しました。この発表では、ヒトの中高年に相当する月齢のマウスを使用し、抗酸化作用を有する緑茶カテキンの摂取を中高齢になってから開始した場合でも、有意な脳機能低下抑制効果が認められたことを示しました。このことから中高年のヒトにおいても、緑茶カテキンを摂取することにより脳機能低下が抑制されることが期待されます。



石川雄一さん

## ■第82回日本生化学会大会で優秀プレゼンテーション賞を受賞

10月21(木)～24日(土)に神戸市で開催された「第82回日本生化学会大会」で大学院薬学研究科生体情報分子解析学講座、修士1年生の黒澤雅俊さんが優秀プレゼンテーション賞を受賞しました。この賞は、同大会のポスターセッション、口頭発表両部門での発表に対して、研究成果と発表態度の両方に優れた若手研究者に授与されます。黒澤さんは、学部4年生より継続して行ってきた「ヒト UDP-グルクロン酸転移酵素 UGT1A1 の細胞周期制御因子による発現調節機序の解明」についての成果を発表しました。これまで解明が困難であったサイクリン依存性キナーゼ2による薬物代謝酵素の負の制御機構を明らかにしたことが高く評価されました。



黒澤雅俊さん

## ■日本フードファクター学会でYoung Investigator Awardを受賞

大学院生活健康科学研究科食品栄養科学専攻・博士後期課程3年の植草義徳さん（食品分子工学研究室）は、11月15(日)～17日(火)に神戸大学で開催された第14回日本フードファクター学会 (JSoFF2009)において、「NMR法による緑茶カテキン類のリン脂質膜中における存在位置の解明」の演題でYoung Investigator Award (YIA) として表彰されました。この賞は、YIA候補者の間で行われる選考会と本発表の2回の審査により研究発表を評価するものであり、植草さんの口頭発表は研究内容・発表スキルともに優秀であるとして高く評価されました。



植草義徳さん

## ■第23回運動と体温の研究会で奨励賞を受賞

大学院生活健康科学研究科食品栄養科学専攻博士前期課程2年の川島孝予さん（人体生理学研究室 鈴木裕一教授）が、9月17日(木)に新潟県の朱鷺メッセで開催された第23回運動と体温の研究会の若手発表のセッションにおいて奨励賞を受賞しました。発表タイトルは「女性の性周期が暑熱下運動時の換気反応に及ぼす影響」で、林恵嗣講師（短期大学部）と鈴木教授との研究の成果を発表し、女性ホルモンの運動時の呼吸調節への影響に関する報告が評価され受賞に至りました。



川島孝予さん

## ■日本食品科学工学会で優秀者表彰

大学院生活健康科学研究科食品栄養科学専攻・博士前期課程2年の尾登賢一さん（食品分子工学研究室）は、9月10(木)～12(土)に名城大学で開催された第56回日本食品科学工学会大会における研究発表コンペにおいて、優秀者表彰を受けました。この賞は、ポスター演題の中から最もインパクトのある発表を行った学生に贈られる賞であり、尾登君の「カテキン類-血清タンパク質複合体の抗酸化特性」の研究発表が特にユニークであると評価されました。



尾登賢一さん

## ■日本水処理生物学会でベストプレゼンテーション賞を受賞

大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻の博士前期課程2年（環境工学研究室）の林広紀さんは、日本水処理生物学会第46回大会（高知大会）で、ベストプレゼンテーション賞を授与されました（11月12日）。同賞に推薦された21演題の中から、特に優れた研究発表7演題が選考されたもので、環境工学研究室では、昨年に引き続いての受賞で、発表演題は「異化的鉄還元能を有する *Geobacter* 属細菌の探索と収集」です。



林広紀さん

## ■日本カテキン学会で優秀プレゼンテーション賞を受賞

大学院生活健康科学研究科食品栄養科学専攻・博士前期課程1年の日下耕二さん（食品分子工学研究室）は、9月9日(木)に名古屋国際会議場で開催された第6回日本カテキン学会総会において、「カテキン類の酸化安定性を高める食品及び生体成分：酸化抑制機構の分類と併用効果の検討」の演題で優秀プレゼンテーション賞を受けました。この賞は、ポスター演題の中から特に優秀な発表であった若手研究者に贈られる賞であり、日下さんの発表は、研究内容と発表スキルにおいて高い評価を受けました。



日下耕二さん（左側）と中山教授

## 「環境と食品の安全性を皆で科学しよう」を開催



DNAをバナナから採取する実験

環境科学研究所 教授 下位香代子

11月25日(水)の18時より、本学の看護棟13411講義室において、日本環境変異原学会第38回大会一般公開講座「環境と食品の安全性を皆で科学しよう」が開催されました。夕方からの開催にもかかわらず、市内外の高校生と市民約180名が参加してくれました。

講座の第1部では、布柴達男教授（国際基督教大学）と本学の木苗学長が、「遺伝子DNAとは何か？」から「私達の身の回りに存在する化学物質がどのように遺伝子を傷つけ発がんをひきおこすのか？」まで基礎的なお話をしてくださいました。第2部では、食品栄養科学部の増田修一准教授、卒業生の益森勝志研究員（食品農医薬品安全性評価センター）、大学内の大会組織委員の先生方、大学院生の指導により、DNAをバナナから採取する実験と顕微鏡による細胞中の染色体の観察を行いました。最後に活発な質疑応答も行われ、化学物質の安全性について「DNA」を通して理解を深めてくれたものと思います。

## 「サイエンスフェスティバル in る・ぐ・る 2009」に参加して

食品栄養科学部 助教 伊藤 創平

8月16日(土)に、静岡科学館る・ぐ・るで開催された「サイエンスフェスティバル 2009 青少年のための科学の祭典」に、食品栄養科学部より伊藤、増田、新井、太田、萱嶋、井上、佐久間(以上教員)、栗山(東北生活文化大学)、森、平野(大学院生)の10名が講師として参加しました。

サイエンスフェスティバルとは、青少年が科学の不思議さや楽しさを実感できるような実験や工作を、大学、高校、科学愛好家などが指導するイベントです。8月8日(土)、9日(日)、15日(土)、16日(日)の4日間行われたフェスティバルの来場者数は1万人を超えて、科学に興味を持つ多くの子供たちや親子連れでぎわいました。

我々の出展テーマは、「ブドウジュースの色はなぜ変わるの?」であり、200名弱の子供たち1人1人に科学の面白さが伝わるよう、丁寧に指導を行いました。ブドウジュースに洗剤や酢など、家庭にある身近なものを加え、ブドウジュースの色がどう変化するかを観察するという簡単な実験でしたが、色の変化に驚き、また更に強い興味を示す純粋な子供達の笑顔に、私たち自身も心地の良い刺激を受けました。今回の出展を通じて、子供たちに実験を楽しんでもらい、同時に科学に対して興味を持ってもらえたことと思います。来年度も参加を考えております。



県大出展ブースで講師一同

## ● 教員の著書紹介 ●

### 『あなたを守る大腸がんベスト治療』

加藤知行監修、愛知県がんセンター中央病院編

昭和堂 全189頁 2009年6月10日刊行 1,800円(税別)

共著者 食品栄養科学部 准教授 栗木清典

私は、第II章「日本人の大腸がんの特徴」、第V章「大腸がんの予防」を執筆しました。わが国の死因の第1位は悪性新生物(がん)で、およそ3人に1人ががんで亡くなっています。大腸がんの死亡率と罹患(発生)率は、男女ともに上位を占めており、食生活の欧米化に伴う肉や脂肪摂取の著しい増加が影響していると考えられています。2015年の大腸がん罹患数(推計値)はさらに増加すると予測されています。本書では、最新のデータに基づいた予防方法を詳細にまとめています。そして、治療経験の豊かな病院医師は、大腸がんの症状、診断、治療、術後のフォローアップについて分かりやすく、図版を多く用いて、できる限り簡潔な文章でまとめております。大腸がんと診断されないための予防対策、もし診断された場合には適切に対処できる一助としてご参考下さい。



### 『歴史認識共有の地平—独仏共通教科書と日中韓の試みー』

明石書店 全238頁 2009年9月30日刊行 3,200円(税別)

国際関係学部 准教授 剣持久木

国境を越えて歴史認識を共有することは可能だろうか。歴史事実の共有は可能だが、歴史認識の共有は不可能だし、目指すべきもない、という見解はしばしば耳にする。しかしながら2006年秋に、この問い合わせに史上初めて肯定的に答える試みが、ドイツ、フランスの教育現場への共通歴史教科書の導入、という形で実現している。本書は、2007年10月にドイツ文化センターと日仏会館という、独仏両国の公的機関の後援のもとに、独仏共通歴史教科書の時間的、空間的な意義を討議した国際シンポジウムの内容を基に構成されている。

歴史認識問題が政治問題化している東アジアに、この共通教科書が提起する射程をめぐって、その可能性も限界も含めて、独仏両国の専門家、教科書作成の当事者、そして、東アジアでの歴史対話の当事者や専門研究者などの間で真剣な討議がなされている。



# 活躍する卒業生・修了生

～看護学部・看護学研究科編～

## すべての人々が健康な生活を実現できるように

2003年3月看護学部卒業

現・静岡県駿東郡長泉町役場 健康増進課（保健センター）勤務 萩野洋二

現在、私は保健師として、また行政職の立場で、乳幼児や妊婦、成人、高齢者など幅広い年齢層を対象とした、住民の皆さん的生活をより健康的なものにするための保健業務を行っています。

その内容は、疾病の予防活動や健康の増進、保健情報の提供などで、全て人々の生活に密着したものばかりです。担当業務としては、がん検診やこころの健康相談、ウォーキング教室などがあり、今年度は新型インフルエンザに関連した業務や相談対応に追われる日々が続いています。毎日、どのようにすれば、行政の中で専門職としての力が最大限に発揮でき、住民の方々の健康的な生活レベルをより向上させることができるのであろうかと、考えています。

しかし、保健師としての私の経験はまだ1年目であり、昨年度までの6年間はNTT東日本伊豆病院で看護師として勤務していました。卒業当初、保健師として働くことは想像もしていなかったのですが、今この職場にいる理由には、NTT東日本伊豆病院での看護師経験が大きく影響していると思います。

回復期リハビリテーション病棟では、脳血管疾患などで後遺症のある患者様に対し、生活に視点を置いたチームアプローチをケアの基本とすることを学びました。寝たきりの患者様が歩いて帰ることができたときの喜びを皆で共有し、成果を実感すること

もできました。また生活習慣病に苦しむ患者様や、高齢者の転倒による骨折を目の当たりにし、病院で終末期を迎える患者様との関わりもたくさんありました。臨床での看護も忘れる事はできませんが、地域住民の生活に着目し健康の維持や疾病の再発予防を行っていくことも大切だと感じました。人の健康を総合的に考えることができるようにこれからも勉強していきたいと思います。

保健師は、看護師と比べて人数が少なく自治体に勤務する場合が多いため、全国の保健師がどのような状況で活動を行っているのかお互いに見えにくいうところが特徴だと思います。最近は近隣にも保健師として活躍している静岡県立大学の卒業生が増えています。皆さん、職場の枠を超えてネットワークを作り、情報交換しながら保健師としての専門性を磨いていきましょう。



ポリオの予防接種会場での一場面

## 県大出身者募集中です！

私は、現在、虎の門病院循環器病棟で働いています。看護師1年目から、現在の病棟に配属になり、今年で4年目になりました。看護師の仕事がいくら大変といっても、今でも学部最後の1年、実習と卒業論文と国家試験の勉強に費やした1年が、私の人生の中で最もきつかった1年となっています。現在使用している名札の顔写真は、そのときの学部4年の冬に撮影したものを使用しているのですが、その顔写真のあまりの不健康さに、この写真はいつ撮ったものかと患者さんとの会話に一役買ってくれています。

2006年3月看護学部卒業

現・虎の門病院勤務 秋山さとみ

「循環器」というと、どのような疾患を扱うのかピンとこない人もいると思いますが、心臓の何かしらの機能が悪くなってしまった人が治療を受けています。不整脈がある、階段を上る等少し身体に負荷をかけると胸が痛くなる、足がむくみ呼吸が苦しい（ここまでくるとやっぱり心不全です…）、このような症状の患者さんが中心です。

また近年、駅や大型店舗で目にすることになったAEDは、私の病棟では必需品といえます。ナースステーション内に緊急アラームがなる → ナース全員で患者さんの元に走る → 心臓マッサージ →

「離れて！」（AEDの登場）…というような状況にもようやく慣れてきました。患者さんは、このようなことが起きないように入院し治療を受けているため、慣れるのに4年もかかりました。冬は循環器の季節、心不全の患者さんが一気に増える季節です。忙しくバタバタする病棟で患者さんには申し訳ないですが、今日もきっとバタバタしてます。

そんな忙しい現在の病棟にはなんと、一緒に卒業した現・看護学部同窓会会長1名、同じく県大2期生である先輩1名が勤務しています。さらに県大1期生ですでに虎の門病院を退職され大学院に進まれた先輩が、ご自身の研究のフィールドとして病棟に出入りしており、静岡県外にも関わらず、県大看護学部卒業生が4人も集まるという楽しい状況になっ

ています。県大の卒業生がさらに集まり、一緒に働くことを期待しています。



県大卒業生3人で（左端が筆者）

## キャリア20年、現役看護師

私は、静岡赤十字病院で働く看護師です。看護師になってから20年以上が過ぎています。看護学研究科を卒業したのは3年前です。自分の仕事に意味が見出せなくなっていくなかで、もう一度、看護を学び直してみようと思ったのが進学を考えたきっかけでした。

10数年ぶりの学生生活に、初めはやる気満々でいたことを懐かしく思い出します。そんなウキウキ気分はあっという間に終わり、10年以上臨床で働いてきた私にとっては、大学での研究活動は想像以上に大変で、特に自分の意見を自分の言葉で表現し、相手に伝えていくことに苦労しました。

また、専攻が看護管理だったこともあり、経営学や情報科学など他の研究科での講義を受けたり、自分が働いたことのない病院での実習や研究活動をしたりと、かなり多方面から刺激を受けることができた学生生活でした。七転八倒しながらも、自分なりに納得しながら、少しずつ前に進むことができた2年間だったように思います。

大学院を卒業した頃の私は、ただ卒業できたことにホッとし、再び臨床に戻り、患者さんや仲間と一緒に居ることができることを嬉しく思っていました。仕事を再開してしばらくしてから、大学に行ってよかったですとジワジワと感じるようになってきています。

看護の仕事は、やりがいがあると同時に非常に厳しい仕事であることも事実です。時に、看護師自身にさえも、看護することの意味や価値が見出せなくなり、看護することに悩み、迷い、立ち止まる人も

2006年3月看護学研究科修了

現・静岡赤十字病院勤務 下山美穂

少なくありません。そんな時に、患者さんから感謝の言葉を頂き看護の成果を確認できたり、仲間と看護のすばらしさを語り合い、看護の価値を共感できたりしたときは、エネルギーになります。加えて、最近は、後輩の看護師に看護することの魅力を伝えられた瞬間に、仕事へのやりがいを強く感じます。

今年4月からは、病棟長を任せていますが、抱えきれない問題が山積みになって、しんどいと感じることもしばしばです。しかし、自分の目標を見失わず、諦めないで踏ん張ることが出来ているのは、研究科での七転八倒があったからだと思います。

大学院での学びは、多くの人とディスカッションする力をつけ、視野を広げることに繋がりました。これは、専門職だからこそ必要な学びだったと改めて感じています。



職場での筆者

★次回は、薬学部・薬学研究科編を掲載します。

# 研究者を目指して

※研究者として国内外で活躍する卒業生・修了生を紹介するコーナーです。

## タイでのポスドク生活について

2008年3月 大学院薬学研究科（博士後期課程）修了

現・農研機構動物衛生研究所・人獣感染症研究チーム在籍 林 豪士

こんにちは。私は、静岡県立大学にて博士の学位を取得後、動物衛生研究所という国内の研究機関にてポスドクをしております。

私の在籍している研究所は、文部科学省の委託事業である「新興・再興感染症研究拠点形成プログラム」の一環として、タイの研究機関と共同研究を行っており、私はそのプロジェクトの一員として、タイのマヒドン大学獣医学部にて高病原性鳥インフルエンザウイルスの研究をしております。ですので、日本の研究所に在籍しておりますが、実際は海外で仕事をしていることとなり、この点は他の海外でポスドクをされている方とは異なると思います。また、特にタイでポスドクをしている点は、特殊だと思いますので、今回はタイでの研究を含めた生活について書きたいと思います。

タイと聞いて、皆さんはどういう印象を持たれていますか？私は、今思うと大変失礼なのですが、田舎の何もない更地のような所で、子供たちがムエタイの遊びをしているような印象を持っておりました。

私がタイで本格的に研究を始めたのは、昨年度の9月末からなのですが、それまでに下準備も含めて、数回タイへ短期出張をしました。特に、一番初めは、ポスドクになってすぐに、一週間ですがタイへ出張しました。正直、今まで一回も海外へ行ったことが無く、国内でも実家である香川と静岡でしか住んでいたことが無い私が、はたして無事に日本へ帰って来れるのだろうか、と不安で一杯でした。

ところが、タイへ行ってみると、首都バンコクは高層ビルが乱立し、大都会がありました。セブンイレブン、スターバックス、マクドナルドなどの店もいたるところにあり、驚きの連続でした。また日本人が多く住む地域というのがあるのですが、そこに行くと日本人を容易に見かけることができ、また日本料理屋もたくさんあります。何かの本にも書いてあったのですが、バンコクは海外で日本人が一番住みやすい場所だと思います。

さて次に、私の行っている研究についてですが、現在マヒドン大学獣医学部にて高病原性鳥インフルエンザウイルスの病原性解析をテーマとして、ウイルスのマウスや鶏を使った動物実験、*in vitro*実験などを行っております。

施設としては、ウイルスを扱うBSL-3実験室、動物室は勿論のこと、その他に遺伝子解析室、細胞培養室などがあり、設備としてもリアルタイムPCR測定機器、FACS、HPLCなど、とても充実した設備となっております。

ですが、異国の地で仕事をするというのは、現地スタッフとのコミュニケーションを含め、とても大変なことがあります。ラボでは一応英語で会話しているのですが、日本人もタイ人も英語がnativeではないので（自分がへたくそ過ぎるというのもあると思いますが）、苦労して

います。日本人特有の英語の発音というのがあると思いますが、それはタイ人にもあり、本当に何を言っているのか分からぬときがあります。例えばtの発音が聞き取りにくく、数字の3(three)さえ理解できず(treeと聞こえます)、思わず苦笑してしまったことがあります。BSL-treeって何なんだと…。

ですが大切なことは、下手なら下手なりに、ボディランゲージでも絵を書きながらでも、伝える努力をすることだと思います。何でもそうですが、出来ない、大変だからと言って何もしないのでは、何も進んでいません。泥臭くても、一步一步進めていけば、きっと何とかなります。（と、今も自分に言い聞かせています。）

海外でポスドクをするというのは、非常に貴重な体験になると思います。勿論リスクもあるので、私は安易に勧めません。ここで書ききれないくらいいろいろなことがあります。ですが、基本的には今の自分の置かれている状況を楽しんでおり、この職を選んだことに関して後悔はありません。

話が変わって恐縮ですが、私は静岡県立大学に入学後、博士の学位を取るまで計9年間県大で学生をしておりました。正直に言いますと、同じ所に居すぎて飽きていました。（勿論同じ所にずっといることで、縦や横の繋がりがより出来る（出来ているはず）など、色々メリットもあると思いますが。）

ですので、卒業したら全く違った環境、違った分野で研究をしたいと思い（そもそも研究を続けるか迷った時期もありましたが）、海外でのポスドクを選びました。（実際はかなり迷って、同期の半ば強引な後押しがあったのが大きいのですが…）ですので、個人的な意見としては、もし博士後期課程に進学した、もしくは進学するつもりであるのなら、海外でポスドクをしててもよいのではないかと思います。もし進路に迷っているのであれば、前言を翻すようですが、とりあえず何も考えずに飛び出してみてはどうでしょうか？（保障しませんが、応援はします。）駄目だと思ったら、戻ってくればいいだけの話です。

人生一回切りです。  
楽しんだもの勝ちです。



マヒドン大学獣医学部

**短期大学部**

## HPS第4期生を送り出して

**短期大学部社会福祉学科 准教授 松平千佳**

第4回目のホスピタル・プレイ・スペシャリスト（HPS）養成講座が無事に終了し、10月16日(金)に受講生13名が修了式を迎えるました。木苗学長より講座の修了書と資格証明書を授与された修了生は一同に晴れやかな顔で、1ヶ月以上に及ぶホスピタル・プレイに関する講義と実習を感慨深く振り返っている様子でした。

HPSは、英国で誕生した遊びをツールに病児や障害児、そしてその家族を支援する小児医療チームの一員となる専門職です。短期大学部では、平成19年に文部科学省より「社会人の学び直しニーズ対応教育推進事業」を受け、英国からHPS2名を招聘し、日本人講師とともに講座を計画し実施しています。実習先も県内、県外を含め6か所の病院や施設で行うプログラムです。

受講生の中には、子どもを残し、あるいは連れて静岡に1ヶ月引っ越してくる人も少なくありません。遠くは秋田や島根から受講生は参加しています。お子さんを白血病で亡くなされたお母さん、ずっと子どもに対する看護の方法に疑問を持っていた看護師さん、抑制や全身麻酔を使った検査に対して他の方法は無いのかとずっと悩んでいた小児科医など、ホスピタル・プレイを学びたいという強い熱意あふれる受講生に励まされながら、講座を実施しています。

第4期生も、これまで本学のHPS養成講座を修了した35名の仲間に入り、それぞれの領域で病児を支える新しい知見をもって活動を始めます。多くの者は、職場において一人でこの領域に対する理解を求めて開拓していかなければなりません。きっと多くの困難があることでしょう。その時に大事な支えとなるのは、同じ学びを共有し同じ境遇にあるHPSの仲間との連携だと思います。実際に、修了生は皆で連絡網と名簿を作り、新しい技術や方法論を開発した際には、惜しまず情報を互いに提供し合い、総合的にホスピタル・プレイが普及することを目指しています。大事な仲間を得ることも、この養成講座の大きな成果ではないかと考えています。

大変うれしいことに、今年度新たな教育GP、「体系的なHPS養成教育開発事業」が採択されました。今後さらに努力を重ね、HPSに関する研究や教育を進めていきたいと考えています。



修了式にて

## —食品栄養科学部3年生による学外研修旅行—

**食品栄養科学部 助教 井上広子・佐藤努・三好規之**

食品栄養科学部3年生の学外研修旅行を9月28日(月)・29日(火)に実施いたしました(引率教職員:桑野稔子・熊沢茂則・増田修一・佐藤努・三好規之・井上広子・渡邊優介)。新型インフルエンザの発症が懸念される中、教員間で事前にその対策・計画を念入りに立てた中での実施でした。幸い当日は、インフルエンザの発症による欠席はなく、滞りなく出発いたしました。

研修1日目は、キリンシーグラム(富士御殿場蒸留所・御殿場市)、マンズワイン(山梨県勝沼市)、信玄もち製造の桔梗屋(山梨県笛吹市)への見学でした。学生たちは、どの研修場所においても興味深く見学し、特にウイスキー・ワインのティスティングや製造工程などについて積極的に質問をしていました。宿泊先は、石和温泉のホテル甲斐路にて温泉・懇親会など有意義な思い出に残る一夜を過ごしました。

研修2日目は、午前中に自然の渓谷美である昇仙峡(秩父多摩国立公園)の散策、昼食は清里高原にてバイキング、午後は萌木の村での散策後、チーズケーキ工房(山梨県北杜市)の見学をいたしました。

2日間天候にも恵まれ、また学生・教職員全員が健康・無事故で終えることができました。1年生時にも同メンバーで日帰りの学外研修旅行を実施いたしましたが、2年間経って3年生になり、食品や栄養についてさらなる専門分野を学んでいる学生たちは、前回の研修旅行に増してより充実感を得た学生が多かったように思います。また親しき友人や教職員らと2日間を過ごし、学生たちにとって学生生活の中で最も思い出に残る機会であったと思っております。



食品生命科学科



マンズワインにて

# はばたき寄金からのお知らせ

## 第12回スピーチコンテスト・第13回文芸コンクール・創造力開発コンテスト

第12回学生スピーチコンテストが「ふるさとへの想い」をテーマに、10月31日(土)剣祭初日に開催され、審査の結果、次のとおり入賞者が決定しました。

部 門	賞区分	所 属	氏 名
日本語の部（日本人） (参加者4人)	最優秀賞	薬学研究科	近 藤 雅 純
	優秀賞	食品栄養科学部	吉 田 真 子
日本語の部（留学生） (参加者5人)	最優秀賞	国際関係学研究科	鄭 軒 鳶（中 国）
	優秀賞	国際関係学部	徐 燕（中 国）
英語の部 (参加者14人)	最優秀賞	国際関係学部	山 本 香 菜 子
	優秀賞	薬学部	高 野 舞 子
	“	国際関係学部	成 松 友 海
	“	国際関係学部	藤 井 雄 太
	“	生活健康科学研究科	内 川 厳 志



スピーチコンテスト会場風景

また、スピーチコンテストに引き続いて第13回学生文芸コンクールと創造力啓発コンテストの表彰式が行なわれました。

学生文芸コンクールは、本年度、文芸部門で56人から57作品（短編小説2、詩15、短歌3、俳句8、川柳25、その他4）、評論・エッセイ部門で2作品の応募がありました。

創造力啓発コンテストは、本年度、9件の応募がありました（昨年度は応募なし）。

それぞれの入賞者は次のとおりです。

### 学生文芸コンクール入賞者一覧

部 門	賞区分	所 属	氏 名	
文 芸	最優秀賞	看護学部	大 谷 美 緒	詩「夏炉冬扇」
“	“	薬学研究科	杉 山 智 基	川柳
“	優秀賞	薬学部	矢 澤 嶺	詩
“	“	食品栄養科学部	米 持 巧	詩「当分の秘密」
“	“	食品栄養科学部	和 栗 智 治	川柳
“	佳作	食品栄養科学部	林 美 香	詩「プリン」
“	“	食品栄養科学部	守 屋 智 恵 美	詩「はこ」
“	“	国際関係学部	遠 藤 ゆ か	詩「意地っぱり」
“	“	国際関係学部	馬 場 歩	短歌
“	“	食品栄養科学部	戸 澤 香 澄	俳句
“	“	国際関係学部	成 岡 和 矢	俳句
“	“	食品栄養科学部	富 岡 三 貴	川柳
“	“	食品栄養科学部	関 紗 織	川柳
“	“	生活健康科学研究科	圓 尾 和 紀	川柳
“	“	国際関係学部	山 村 弥 生	その他「夏の思い出」
“	“	薬学部	亀 里 真 那	その他「ハルの街」

部 門	賞区分	所 属	氏 名	
文 芸	努力賞	看護学部	大 谷 美 緒	短編小説「ホログラム。」
〃	〃	生活健康科学研究科	遠 藤 亮	短編小説「オリオンの季節」
〃	〃	薬学部	成 島 悠 太	詩「旅立ち」
〃	〃	食品栄養科学部	依 田 美由紀	詩「道」
〃	〃	国際関係学部	白 濱 秋 歩	短歌
〃	〃	薬学研究科	板 垣 宏 亮	川柳（英語表記）
評論・エッセイ	優秀賞	生活健康科学研究科	圓 尾 和 紀	「北アイルランドへの留学」
〃	佳作	生活健康科学研究科	内 川 巍 志	(無題)

## 創造力啓発コンテスト入賞者一覧

賞区分	所 属	氏 名	作 品 名
最優秀賞	薬学部	成 島 悠 太	「ワンタッヂエッペンドルフチューブ開け器」
優秀賞	食品栄養科学部	村 松 美 穂	「学長キャラクターの県大グッズ」
アイデア賞	食品栄養科学部	守 屋 智恵美	「湯温によって色が変わるやかん」
〃	国際関係学部	田 中 綾 乃	「ゴキブリ駆除に！大型ロボットぱっくん」
〃	経営情報学部	内 野 正 敏 他	「学生と地域をつなぐ便利な仕組み」、「便利にするシステムの実施」



## モスクワ国立国際関係大学への短期交換留学生へ奨学支援金を授与

本学の交流協定校であるモスクワ国立国際関係大学への本年度の短期交換留学生として派遣されることになった国際関係学部3年の中口怜子さんに奨学支援金が交付されました。

木口さんは、9月から12月まで、同大学に留学しました。



左から木苗学長、木口さん、国際関係学部・島田准教授

## はばたき寄金に寄付をしてくださった方々（敬称略）

木苗直秀（学長）、山田浩（薬学部）、小針進、渡邊聰、小谷野俊夫（以上、国際関係学部）

# 第1回学長杯争奪学内駅伝大会開催

学長杯争奪学内駅伝大会運営委員長

薬学部（身体運動科学分野）准教授 大石哲夫

12月5日(土)、午前9時前、わずかな日差しが時折顔をのぞかせる空の下、第1回目の学長杯争奪駅伝大会に出場する選手達が少しづつ集まってきた。ちょうど小学校の運動会前の雰囲気に似た、何となくわくわくする空気が漂い、静かな中にも大会前の緊張感がみなぎってくるのがわかる。

やや興奮気味の顔、努めてリラックスを装う顔、仲間と談笑する顔、不安げな顔、何となくあたりの空気を探りながら、それぞれに一見手持無沙汰に時間の来るのを待っているようだが、もう身体はアドレナリンを満たし、充分に走り始める準備はできているようである。

“元気がほしいな！”最近学内を歩いていてよく感ずることである。静岡県立大学が、少し元気がなくなっているのではないかという心配が隙間風のように私の中に吹いていた。

C O E をはじめとするアカデミックな活動は随分と頑張っているが、他のキャンパスライフはどうだ、はち切れんばかりの若さに溢れていると言えるだろうか？私の専門分野であるスポーツ活動を見る限り“否”と言わざるを得ない。良い例が、この静岡の地で、サッカー部でさえ11人ぎりぎりの人数である。

かつては、2～3チームは楽にできる人数を誇っており、サークルのチームにいたっては少々オーバーに言えば50人は楽にいて、静岡市内の社会人リーグに参戦していた。グランドに満ちていた、あのエネルギーはいったい何処へ消えてしまったのか？

体育館の中でもグランドでもテニスコートでも、熱心に練習している学生はいるが、まとまった数で活動している状況にはそう多く出会わない。まして部員の構成を聞けば、ある年代に集中していることはあっても満遍なくそれぞれの学年に人員がいるわけではない。言えば将来衰退の道が見える状態である。

課外活動に充分な人材・エネルギーが充てられてないだけで、大学の他の領域にあまた元気が割り振られているならば、そう心配することもないのだが…。

ちょっとした頂に身体を運ぶと、平地では見えなかつたものが見える。わずかなエネルギーかもしれないが、仲間と一緒に走ってみると、身体を動かす心地よさを感じてもらえるかもしれない。過去の世界に経験した、何かに一生懸命になった、忘れかけていた自分を思い出してくれるかもしれない。

走ってくれた人も、応援してくれた人も、ゴールに走りこんでくる顔に取り繕った顔はなく、起伏の激しい2.5kmの距離を遅くも早くもそれぞれ懸命に走ってたどり着いた、小学生以来の童心の顔であった。

フィニッシュを目指すチームのランナーを囲み、エネルギーをふりしぼったであろう身体をさらに鼓舞するように声援を送る光景は、ランの質を問うより以前に、はるかに質の高いゲマインシャフトの世界が創られていることを容易に想像させた。

ある一人のランナーが言っていた。“来年はもっと早い時期から走り始めよう…”彼はひとつ小さな頂きに登ったのではないだろうか。来年、もう一つ登ると、また違った景色に、彼の何かがさらに変わっていくのではないだろうか。

走るのは自分自身である。走った結果を得るのも自分自身である。こんな言葉を思い出した。“やっただけのことしかしないが、やっただけのことはある”

actionがなければreactionはない。些細なことであったかもしれないが、実行した結果を知るならば、さらに次に向かう糧となるはずである。小さな走りがきっかけとなり、それがどう変わっていくか、すぐに回答は出ない。

かつて、県大の先輩にすごいのがいた。東海地区の大学で何位、日本で…、小さい小さい、もっと長いスパンで考え、思い切って世界に出ていったらどうだ、の声を真剣に受け、彼はほんとにして行った。

大学から競技をはじめたT君だが、卒業3年後世界一のチームを有する国に行って10年間プレイをした。日本の有名大学、有名社会人チームから来るライバルを押しのけ、世界一のチームのキャプテンを有するチームで活躍した。

両膝関節にテープを巻かなければプレイできない、大男たちが割拠する中で170cmに満たない身体でやりとげた10年間、県大のごく小さな世界から、見事に大きな世界に羽ばたいてくれた彼が、小さなきっかけの先を安易に決めてはならないことを見事に教えてくれた。

駅伝の小さな走りがやがて大きな走りへとチェンジするきっかけとなれば、この大会を開いた趣旨は多いに生きることになる。

木苗学長流に拙文を締めるなら“小さな趣旨・種子よ、大きく育て”であろう。  
大変なご苦労を厭わず大会実施に奔走、ご尽力下さった方々に感謝、感謝である。ありがとうございました。来年も盛会となることを期待します。



スタート前に選手を激励（壇上が筆者）



コスプレをしたランナーも登場



号砲とともに参加27チームが一斉にスタート！



歓喜のゴールの瞬間



木苗学長から入賞者へ表彰

県大で12月5日㈯に開催された第1回学長杯争奪学内駅伝大会には、学生や教職員をメンバーとした27チーム（5人／1チーム）が参加しました。

各部門の入賞チームと男女ごとの区間賞は、以下の通りです。

コース：県立大学グラウンド～県立美術館～芝生園地（1人約2.5km）

男子運動部の部 (参加：5チーム)			
優 勝	ギニュー特選隊 (サッカーチーム)	47分22秒	川崎伸晃（経1）、澤木暁央（経2）、加納宏紀（経1）、青木雄志（経2）、小下雅比古（食3）
準優勝	男子バスケットボール部	47分45秒	山岸祐己（経2）、浦志将（薬2）、黒田 怜（国2）、遠藤壮真（薬2）、白賀昌宏（経2）
第3位	ジョグ部（男子）	48分08秒	相澤光輝（食2）、杉本 覚（薬3）、佐藤 聖（薬3）、越智幹記（薬M1）、遠藤 亮（生M2）
男子一般の部 (参加：14チーム)			
優 勝	ケーシィ	50分56秒	永井啓裕（薬1）、米持 巧（食3）、大石奈穂美（食2）、加藤尚視（薬2）、和田健吾（薬3）
準優勝	天文学部	52分38秒	保坂大樹（薬2）、八木俊輔（薬2）、服部浩明（薬2）、森下晴全（薬2）、浅沼雄太（薬2）
第3位	アリオン	52分53秒	天野祥吾（薬M2）、松井卓也（薬4）、重松宏和（薬M2）、吉田 徳（薬M2）、古川琢磨（薬4）
男女混合の部 (参加：2チーム)			
優 勝	チーター	1時間2分34秒	高井一成（薬M1）、中尾 歩（国2）、田代京子（薬D3）、佐藤博史（薬M2）、山崎寛史（薬M1）
女子の部 (参加：6チーム)			
優 勝	常笑	1時間1分27秒	矢田エレナ（国2）、加藤さゆり（国2）、堀池純加（国2）、木下麻生（国2）、春日井洋子（国2）
準優勝	ジョグ部（女子）	1時間1分43秒	小西里沙（国1）、富阪真夕（食2）、佐藤睦美（国1）、日向浩子（食2）、北村実穂（食2）
第3位	医薬 Girls+α	1時間1分54秒	鈴木美希（薬M1）、岡島亜衣（薬4）、山下美菜（薬M2）、西川 薫（薬4）
男子区間賞		女子区間賞	
浦志 将（薬2）	7分43秒	小西里沙（国1）	10分17秒

## 図書館だより

10月から11月にかけて、図書館の貴重資料である「岡村文庫」資料の展示会を行いました。

「岡村文庫」とは、南ベトナム戦争などの報道写真や『南ベトナム戦争従軍記』(岩波新書)などのベストセラーの著者としてもよく知られている、国際報道写真家 岡村昭彦(1929年～1985年)が所蔵していたコレクションのことです。図書館では1989年(平成元年)に資料を受入れ、その後「岡村文庫」の名称で広く学内外の皆様にご案内してきました。

### 剣祭での「岡村文庫」の紹介

10月31日(土)から開催された「第23回剣祭」にあわせ、本学の教員で構成されている「岡村昭彦文書研究会」と共催で、「岡村昭彦写真展」を開催しました。



岡村の関係者の皆様にもご来場頂きました

写真展では、生と死が隣り合う戦場の現場から岡村が問い合わせ続けた、「我々はどんな時代に生きているのか」のメッセージを、学生は真摯に受け止めてくれました。



写真とあわせて貴重資料を展示しました

### 岡村のホスピス運動の思想に迫る

11月7日(土)～8日(日)に「第33回日本死の臨床研究会年次大会」が名古屋国際会議場で開催されました。この研究会は、日本における死の臨床の運動やホスピス運動を牽引してきた最も歴史のある研究会です。大会では、日本におけるホスピスやバイオエシックス運動の先駆的な役割を果たしてきた岡村を顕彰す

ると共に、岡村の写真や岡村文庫資料を紹介する企画展も行われました。展示会場には、1,000人を超す入場者があり、岡村が『ホスピスへの遠い道』執筆時に利用した図書や雑誌、海外で購入した貴重な資料などを紹介することができました。



展示会場では、岡村の映像も放映しました



岡村文庫資料に見入る入場者

## 《本学教員からの寄贈著書》

平成21年9月から平成21年12月までに図書館に寄贈していただいた先生方の著作は次のとおりです。

・剣持久木先生（国際関係学部）

『歴史認識共有の地平』 剣持久木ほか著 明石書店 (375.32/R25)

・津富 宏先生（国際関係学部）

『犯罪の生物学』 D.C.ロウ著 津富宏訳 北大路書房 (326.33/R78)

・山田 浩先生（薬学部）

『認定CRC試験対策講座』 山田浩著 メディカル・パブリケーションズ (499.4/Y19)

・佐々木隆志先生（短期大学部）

『日本における終末ケアマネジメントの研究』 佐々木隆志著 中央法規出版 (369.9/Sa75)

## シリーズ 私の1冊の本

図書館では、「私の1冊」と題して、先生方が今までに読んで、感動し心に残った本をシリーズで紹介しています。紹介された図書は、県立大学附属図書館の書架に配架してありますので、まだ読んでいない方は是非この機会に読んでみてください。

**看護学部 准教授 西田公昭**

紹介図書名：『悪魔のささやき』（集英社新書0354C）

著者名：加賀乙彦

出版社名：集英社

I S B N : 4-08-720354-9

図書館所蔵：閲覧室2階 326.34/Ka16



悪いことをした人は、本質的に悪い心の持ち主なのでしょうか。逆に良いことをした人は、本質的に良い心の持ち主といえるのでしょうか。そんな疑問が私にはずっとあります。人間の心理を研究していく、この真逆の行動をとった両者でも、心理的には、実はあまり違わない人間なのかも知れないと思うようになってきました。そのきっかけとなったのは、オウム真理教の事件でした。私は、この15年の間、その被告人たちと向き合ってきました。そして世間から優秀と目されて、著名な大学や大学院に進学して前途有望であったはずの彼らが、なぜ、いかにも怪しげなリーダーに付き従い、無差別殺人のようなあからさまな凶悪犯罪にさえも手を染めたのか、その心の闇に潜む謎を解明したいと考えてきました。

本書はこのような問題について、するどい心理分析からヒントをくれています。つまり、人は意識と無意識の間のふわふわとした心理状態にあるときに、罪を犯したり、自殺をしたり、扇動されて一斉に同じ行動をしてしまったりする。その行動への後押しをするのが、「自分ではない者の意志」のような力です。それが「悪魔のささやき」です。誰にでも潜んでいて、心弱った人間の背中を「ポンと押す」ものである悪魔は、オウム真理教事件の被告人の犯罪行動を的確に言い当てていると思いました。つまり、戦後民主主義における「個」のない脆弱な日本人の精神構造、若者をオウム真理教への走らせるに至った豊かさを餌に太り続けた悪魔のささやき。これこそ、善良なる人を悪事にとかりたてる恐ろしい敵なのだと説明されています。

筆者である加賀乙彦氏は、精神科医、心理学者として作家として半世紀以上にわたり日本人の心を見つめてきました。特に筆者は、拘置所の精神科医として多くの死刑囚や無期懲役囚とかかわってきた方で、悪魔のささやきという発想はその経験から生まれたのだろうと推察できます。なお、死刑囚を描いた小説の『宣告』は、映画化されるほどのベストセラーになりました。本書において加賀氏は、戦前の軍国主義、六〇年代の学園紛争、オウム真理教事件、世間を震撼させた殺人事件など数々の実例のもとに、悪魔のささやきの正体を分析してくれています。そのうえで筆者は、これから私たちが、このような悪魔のささやきをいかにして避けるかについて方策を提言しています。

本書が、私を魅了したのは、何か自分の見ようとしている人間心理の本質的な弱さに共感したのではないかと思います。私が拘置所で面談し、法廷で出会ったオウム真理教事件での被告人たちは、皆とても優しいし、礼儀正しいし、真面目な人でした。彼らにささやいた悪魔は、決して特別な人々にだけ棲みついているのではなく、私や本学のすべての人にも棲みついていると思います。そして私らがうっかりしていると、意識の周辺に入ってくる無数の情報に動かされて、いつの間にか自分の頭で考えたり、反省したりしなくなったりするのだということを、是非とも肝に銘じて生きていかなくてはいけないと考えています。本書は、そんなことを考えさせてくれた良書でした。

## HOP Eミーティングに参加して

大学院薬学研究科博士後期課程2年 鰐渕 清史

私は、9月27日(日)から5日間にわたって、箱根で開催された日本学術振興会主催の第2回HOP Eミーティングに、日本のメンバーの一人として選んでいただき、参加することができました。

このミーティングは、日本全国、アジア太平洋地域から選ばれた大学院生らが参加し、参加者同士のネットワーク構築など将来を担う研究者として飛躍する機会を提供するため開催されたものです。

日本人40人を含めた104人の大学院生・研究員に加えて、ノーベル賞受賞者である7人の先生方と、寝食を共にして交流し、ノーベル賞受賞者の若手研究員に向けた講演、さらには人文社会・芸術分野の講演やコンサートなど多岐にわたるプログラムで、貴重な体験をすることができたと思います。

各国の参加者とグループに分かれてのプレゼンテーションでは、ミーティング時間だけでなく空き時間を利用して話し合い、特に夜のフリーディスカッションでは、強い印象を受けました。

「将来どうしていくか」、という話題になったときあるバングラデッシュ人が「私はアメリカにポスドクに行っていて、そして、今は母国の感染症センターで働いている。これからは母国のために働く。君たちはまだ若いから世界を体験し、将来を見据えるべきだ。」と言っていました。ちょうどこのとき、「なぜポスドクの留学先は欧米であってアジアではないのか」とも話をしていたため、今後、日本ひいてはアジアの発展を考える上で、やはりチャンスがあるのなら世界を見て、10年後、20年後の将来について考えを巡らせる必要があることに気づかされました。

また、ノーベル化学賞受賞者の野依良治先生、Yuan Tseh Lee先生の講演では、それぞれの先生の、「Deep thinking」という言葉と、「What is new?」、「What is new?」という問いかけがあり、若い研究者は自らが行っている研究に対して、「何が大切なか」について「深く考え」そして「何が新しいのか」「次に何をしていくのか」を明確な形にして先に進んでいかなければならぬ、と感じました。

アジア太平洋地域から科学の様々な分野の人が集まり、いろいろな視点で遠慮なく話し合える場は大変貴重でした。ノーベル賞受賞者による素晴らしい講演、24時間英語漬けというかつて無いほど濃密な素晴らしい時間を過ごすことができたと思います。

最後に、本プログラムの主催者である独立行政法人日本学術振興会に深く感謝し、是非とも第3回HOP Eミーティングが開催されることを祈っております。

## 静薬学友会よりお知らせ

おしゃれな

### 薬学部カレッジホールが勉強スペースに変身！

7月8日(水)、薬学部1階のカレッジホールに、テーブル4台と椅子40脚が設置されました。それまであまり有効活用されていなかったスペースが、落ち着いた勉強スペースへと生まれ変わりました。

この事業は、薬学部薬物動態学分野・山田静雄教授の「学生が自由に勉強できる空間を提供したい。」との思いから実現しました。静薬学友会としても、費用の一部を「大学行事援助費」より支出いたしましたので、ここに報告させていただきます。

卒業生の皆様も、大学にお越しの際には是非一度薬学部カレッジホールに足を運んでみてください。開放感溢れる吹き抜けの空間で、後輩たちの傍ら読書などいかがでしょうか。



カレッジホールにて勉学に励む薬学部生

## ヘルシーメニュー注文で、アフリカの子どもたちに給食を！ ～学食に「Table For Two」導入～

学生団体「G E L」代表 北村 実穂（食品栄養科学部2年）

発展途上国の飢餓と先進国の肥満や生活習慣病などの問題に取り組む日本発の社会貢献活動、「Table For Two」（以後、T F T）。私たち学生団体「G E L」は、食品栄養科学部フードマネジメント研究室と国際関係学部湖中ゼミの協力により本学の学生食堂にT F Tを導入することができました。

T F Tは、「二人の食卓」を意味し、「二人」とは先進国にいる私たちと発展途上国にいる子どもたちのことを指します。私たちが対象となる低カロリーで栄養バランスの良い定食を購入すると、1食につき発展途上国の給食1食分の金額にあたる20円がT F T事務局を通じて発展途上国に寄付され、そこで子どもたちの学校給食になります。

私たちがT F Tを知ったのは昨年2月、湖中ゼミ主催の模擬国連会議に出席し、そこでT F T事務局の方の講演を聞いたのがきっかけです。後日、湖中准教授からの後押しもあり、大学に導入を働きかけることに踏み切りました。

導入を進めるにあたって、すでにT F Tを導入している他大学の方からアドバイスをいただき、大学と学食を運営している企業との交渉を進めていきました。10月中旬導入を目標に、フードマネジメント研究室にメニュー考案を依頼し、学生対象のアンケートも実施しました。途中、テスト期間と重なったため難航した時もありましたが、夏休み前に必要な資料を集めることができ、予定通りの実施が可能となりました。10月に入り導入も間近になると、夜遅くまでポスターを作ったり、看板を作ったりと宣伝活動に力を注ぎました。

導入前は、ほんとうに売れるのか、どれぐらいの人がT F Tに関心を持ってくれているか、など不安な点は山ほどありました。しかし実際に導入してみると、不安を吹き飛ばすほどの好評をいただいています。ヘルシーメニューを食べた人の中には、「美味しかった」と一言かけてくれた人もいて、大変うれしく思いました。並行して行っている募金活動でも、毎回多くの募金が集まっています。

今後は、季節ごとにメニューを変えて活動を維持していきたいと思っています。売上など現実的に考えなくてはならないこともあります、今後については不確定要素が多いですが、最善の努力をしてできるだけ長く、そしてみんなの心に深く根付かせていきたいと考えています。

健康問題というと肥満や生活習慣病、メタボリックシンドロームなどの問題が一番に思い浮かびますが、若い女性に見受けられる「痩せ」もまた深刻な病気を招く恐れがあります。実際、静岡県立大学でも健康診断の結果によると、「肥満」よりも「痩せ」の問題が浮き彫りになっています。しかし日々の「食」を見直し、改善を行う機会がなく、さらにこれらの健康問題は自分自身の問題としては捉えにくいものであるため、見逃されがちです。

今回T F Tを導入し、ヘルシーメニューを食べてもらうことで、肥満の人も痩せの人も、自分の食生活について見直して考えてもらうとともに、自分が飢餓に苦しむ子供たちの力になれるということを感じてほしいです。

世界では、飢餓だけでなく様々な食に関する問題が発生しています。これらの問題を解決するには、私たちは何をしたらいいでしょうか。今回、T F Tを通じて「寄付」が行われますが、これは食糧問題そのものを解決する根本的な解決策にはなりません。今回の活動でより多くの人が、世界で起きている問題に正面から向き合い、考えて、行動するきっかけになればと思っています。



G E Lメンバーで作成したT F Tのメニューポスターと

# 静岡の元気は若者から!

## 若者エンパワメントセンター（YEC）設置委員会の取り組み

2009年4月、静岡県立大学国際関係学部の学生と教員が手をとり一つのプロジェクトが始まりました。それが、若者エンパワメントセンター（YEC：Youth Empowerment Center）設置委員会です。

若者エンパワメントセンター（YEC）設置委員会は、静岡県内に「若者の社会参画活性化の必要性と可能性」について考える場を提供するもので、静岡で若者の社会参画活性化の芽を少しずつ多くの方たちと育てていけたらと思い、全4回の連続ワークショップ（11月22日（日）、12月12日（土）、1月9日（土）、2月28日（日））を企画しました。

第一回目のワークショップは、関口昌幸さん（横浜市青少年育成課担当係長）に横浜市における若者の社会参画活性化の取り組みについて講演をしていただき、その後参加者全員で「静岡の若者を元気にするためにできること」をワークショップを通して考えました。このようにして第一回目のワークショップは無事終了し、多くの参加者と静岡の若者の社会参画活性化の必要性とそのためのアイディアを共有できたのではないかと思います。

今後はワークショップから得たアイディアや参加者とのつながりからYECでできることを探り、具体的な活動に取り組んでいく予定です。これからもよろしくお願いします。

（YEC公式ブログ

<http://ameblo.jp/youth-empowerment/>



第一回目のワークショップ



### ニュース&トピックスを公式サイトへ！

教職員・学生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動など様々な情報について、県大公式サイトへの掲載を是非お願いします。また、はばたきへの寄稿もお待ちしています。大歓迎します。

公式サイトへの掲載は、各部局の公式サイト担当者へ依頼してください（不明な場合は、広報室までお問い合わせください）。

はばたき寄稿は、教育研究推進部・広報室（はばたき棟3階）までお願いします。

E-mail:koho@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報室（事務局 TEL 054-264-5130）

静岡県立大学ホームページアドレス：<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>